

| 最終試験結果の要旨   |                            |
|---|----------------------------|
| 学位申請者<br>氏 名  | <b>Junayed Uddin AHMED</b> |
| 審査委員  | 主査 佐賀 大学 教授 小林 恒夫          |
|   | 副査 佐賀 大学 教授 白武 義治          |
|   | 副査 鹿児島 大学 教授 田代 正一         |
|   | 副査 鹿児島 大学 教授 岩元 泉          |
|   | 副査 琉球 大学 教授 内藤 重之          |
| 審査協力者   |                            |
| 実施年月日   | 平成 26年 1月 11日              |
| 試験方法 (該当のものを○で囲むこと。)  |                            |
| <input checked="" type="radio"/> 口答 <input type="radio"/> 筆答  |                            |
| <p>主査及び副査は、平成26年1月11日の公開審査会において、学位申請者に対して学位申請論文の内容について説明を求め、関連事項について試問を行った。具体的には別紙のような質疑応答がなされ、いずれも満足できる回答を得ることができた。</p> <p>以上の結果から、審査委員会は申請者が博士（農学）の学位を受けるに必要な十分の学力ならびに識見を有すると認めた。</p> |                            |

|  |                            |
|--|----------------------------|
| 学位申請者<br>氏 名   | <b>Junayed Uddin AHMED</b> |
| <p>[質問1] バングラデシュにおいて粉ミルクの輸入量が一時期減少した要因は何でしょうか？<br/>また、その時に政府は輸入制限措置を取ったのですか？</p> <p>[回答1] 1980年代の輸入量の減少は、チェルノブイリ原発事故を契機としてヨーロッパからの輸入物が減少したことによります。また、2000年代に減少したのは、牛乳へのメラミン混入事件を契機に中国やインドからの輸入物が減ったためです。そしてその時に政府は輸入制限措置を取りました。なおその後2007年に粉ミルクの関税が75%から35%に切り下げられたため、その後は徐々に増える傾向にあります。</p> <p>[質問2] 酪農家の階層規定についてですが、バングラデシュでは6～25頭を中規模、日本では30～50頭を中規模と規定した理由は何でしょうか？</p> <p>[回答2] バングラデシュについては、酪農家の平均所得が一般サラリーマンの平均収入を下回る2～5頭規模を「小規模」、そして、一般サラリーマンの平均収入を超える規模の6～25頭規模を「中規模」としました。日本でも同様に、サラリーマンの平均収入を下回る酪農所得しか得られない1～30頭規模を「小規模」、それを上回る30～50頭規模を「中規模」と規定しました。そして、その前後を「小規模」、「大規模」としました。</p> <p>[質問3] バングラデシュの酪農の発展において協同組合の役割が重要だという状況については我々も認識しているのですが、しかし、具体的な事例においては、たとえば病気対策の条件が良くない全体状況のもとで確かに協同組合のメンバーは組合の獣医から予防注射などの良好なサービスを受けられるというメリットを有していますが、他方で生乳販売価格は個人企業へのそれよりも低いという実態もあると思います。そのような点が協同組合の持つ今日的・具体的な問題ですから、その辺の問題の掘り下げや分析が重要だと思います。いかがでしょうか。</p> <p>[回答3] 私どもが調査したSirajgonj地区とPabna地区では協同組合の力が強く、生乳の販売価格も個人企業へのそれよりも高かったという結果を得ました。もちろんご指摘のような事例も少なくないと思いますが、ただ、獣医からのサービスや飼料用地の利用などのメリットを考慮すると全体としてメリットのほうがデメリットよりも大きいと判断しました。ただし協同組合の活動や組合員への寄与においては地域差がありますし、また生乳の流通ルートや価格形成も多様で複雑であるため、今後は物流チャネルを考慮した研究を行っていく必要性も感じています。</p> <p>[質問4] Figure4-6のFactoryとは何をするところですか？</p> <p>[回答4] 生乳を原料にして牛乳などの乳製品を加工・製造するところです。</p> <p>[質問5] 同図でPrivate processorとFactoryは異なるものですか、同じものですか？</p> |                            |

[回答5]同じものです。

[質問6]Figure4-1のLocal IndustryのところDairyとCropと2つ書いてありますが、1つの工場DairyもCropも加工しているのですか？

[回答6]いいえ、DairyとCropの工場は別々の工場です。Dairyの工場では乳製品の製造を行っており、他方のCropの工場では米粉や米加工品を製造しております。そして、地域の中では両方とも資源循環の一環をなしているため、一緒にして書いております。

[質問7]バングラデシュでは生乳はどのような形で使われ（消費され）ていますか？

[回答7]以前は、ごはんに入れて食べたりして、牛乳そのものとしての消費の習慣はあまりなかったのですが、現在では100%生乳原料のカードや牛乳を消費する習慣が徐々に広まってきました。

[質問8]日本においてSustainable conditionsとは何ですか？

[回答8]6次産業化だと考えています。

[質問9]6次産業を行っているのは「大規模経営」ではないですか？

[回答9]3つの事例の中にはTable3-3のFarmAのように30頭規模の「小規模」ないし「中規模」経営も含まれておりますので、中・小規模経営も6次産業化が可能だと考えております。

[質問10]Local breedとCross breedとは、どう違いますか？

[回答10]Local breedとは地方の在来の牛のことを指し、それとホルスタイン種との交雑種がCross breedです。

[質問11]Cooperative Ideologyとは何ですか？

[回答11]加入・脱退の自由原則等の規約が守られ、組合員がそれらの活動の結果を享受している組合組織と組合員との間の良好な関係のあり方をそのように表現しています。

[質問12]バングラデシュの酪農は自給的性格が強いと思いますが、牛乳消費は増えているのですか？

[回答12]上述のように、今日ではカードや牛乳といった生乳原料100%の製品の消費も増えつつあります。

[質問13]他方日本では、牛乳は日本人に合わないという考えや若者の牛乳離れも目立ち、日本の牛乳消費は増えない傾向にあります。将来どうなるとお考えですか？

[回答13]確かに牛乳の消費量は減ってきていますが、乳製品加工用の国内生乳生産量は増えておりますので、乳製品(加工品)のほうの消費はまだ増えていくと考えられます。